



子育て情報 2月号

平成 29 年 2 月

椋山女学園大学附属幼稚園

ことばの力

園長 横尾 尚子

出勤前の 6:50。郵便受けから新聞(朝日)を取り出し、1 面隅のコラムに目を通して家を出る。それが私の日課です。そのコラムは、哲学者鷲田清一氏の「折々のことば」。詩人大岡信氏の「折々のうた」からのファンです。古来の金言からツイッターのつぶやきまで、様々なことばが紹介されています。心をキュッと掴まれると何度も何度も読み返してしまっていて、慌てて家を飛び出すこともしばしばです。そして帰宅後、気になったことばをもう一度ゆっくり読み返し、切り抜き、手帳に挟みます。その中から、近々の 3 つをご紹介します。

◇ みんなを照らす太陽も／たまには休んで／月にもなりたいたいと／思う時もあるはずだと／分かる人でありたい (岩崎 航：点滴ボール 生き抜くという旗印 から)

幼くして筋ジストロフィーを発症し、凄絶な吐き気に苦しみ、人工呼吸器と栄養摂取の管を外せない岩崎さん。消えかけた火鉢の底の「埋(うずみ)火」のような力を日々ふり絞り生きてきた。「在る」ことが苦難そのものだと知るからこそ、彼を支える家族らのエンドレスのがんばりを思い、こう詠(うた)う (鷲田清一)。

◇ よくおぼえておきなさい。恩というものは他人に着せるものではない。自分が着るものだというのを、な…… (池波正太郎：仕掛人・藤枝梅安シリーズ「殺しの四人」から)

◇ お前は常に自分が正しいと思っているだろう。しかし正しいことを言うときは人を傷つけるということを知っておけ (竹下 登：元首相から諭されたという石破議員の講演録から)

一つ目のことばでは、岩崎氏とご家族の今日に心を寄せながら、家庭や職場、幼稚園や学校、病院や施設等々、様々な社会の営みの場で、力を尽くし、周りを支え・励ます太陽のような人々、でもそれを当たり前とせず、岩崎氏のようなあたたかい眼差しで受け止めること、その大切さを教えられています。池波氏と竹下氏のことばは、折に触れ心の中で唱えるようにしています。たいした事もしていないのに恩着せがましい態度を取ってしまったたり、正しいことを言っていると有頂天になって相手への配慮を忘れてしまったたり、そうなりがちな私を、戒めることばとして胸に刻んでいます。

ことばの獲得期にある幼児にとって、日常触れることばの影響力は絶大です。その影響の受け方は、一様ではなく、発達や個人差等を充分考慮しなければなりません。3 歳で日常会話にはほとんど困らない程度のことばを獲得した子ども達の、4 歳の頃に注目してみましょう。

4 歳児は「ふりかえりはじめる 4 歳」とも言われ、点検の目が芽生えます。「主観のできる」で猪突猛進できた 3 歳から、「客観的にもできる」自分でありたいと願うようになります。そのため、ざっくり褒められると、そうではない部分があることに思い当たって、かえって意気消沈してしまう子もいます。子どもの状況をよく観てよく聴いて、適切なことばで評価することが大切です。また「ふりかえる 4 歳」は、親子関係もふりかえります。しかし、判断する手がかりが乏しいので、明示的に示されたことばや表情で親の気持ちを判断するしかなくて、オロオロしたり、必要以上にいい子になったりと、けなげな努力をしまいがちです。「ぼく(私)のこと好き？」の問いには、ことばや表情をフル活用して、惜しみない愛をお伝えください。

ことばによる理解力が育ちつつあるけれど、まだまだ不十分なのが 4 歳児です。そのため、活動の入り口で戸惑ってしまい、初めての事への不安が大きくなりがちです。でも、活動の中で経験を吸収して行く力がとても大きくなっているのも 4 歳児。「入り口は丁寧に、内容は豊かに」日々の保育を進めて行きます。ことばで自己の行為をコントロールする「言語の行動調整機能」は、5 歳へ向かって伸びて行きます。